

アリエル

二〇〇四年秋号 発行人 井田 泉

〒六〇三―八一―六四 京都市北区紫野東御所田町一七
電話 〇七五(四五二) 二二八七

「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。」
出エジプト記一六・一五

秋

ライナー・マリーア・リルケ

木の葉が落ちる

落ちる 遠くからのように。

まるで 天で

遠い庭が 枯れたかのように。

木の葉が落ちる

否むみぶりをしながら。

そして夜ごとに 落ちる

重い地球が

すべての星から 孤独の中へと。

わたしたちはみんな落ちる

この手も落ちる。

そして よくごらん

ほかの人たちを。



それ(落下)はすべての人の中にある。

しかしひとりの方があって

この落下を

かぎりなく優しく

その両手で 支えてくださる

地の中からのイエスの祈り

――神学教育に寄せて――

これは二〇〇四年一月一日、日本

基督教団部落解放センター主催「第一

七回神学校等人権教育懇談会」の礼拝

で語ったものです。場所は滋賀県野洲

市の日本基督教団近江平安教会。

讚美歌 21 一二〇 主はわが飼い主

「カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。主はカインに言われた。『お前の弟アベルは、どこにいるのか。』カインは答えた。『知りません。わたしは弟の番人でしょうか。』主は言われた。『何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。』」創世記四・八―一〇

「あなたがたが近づいたのは、……新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。」ヘブライ二・二二―二四

この人権教育懇談会を長年にわたりお世話くださっていた角樋平一牧師が、今年九

月二六日に逝去されました。しばらく黙禱をささげたいと思います。

の要請です。

ここに三つの意味を思います。

今年の春、痛ましい出来事が起こりました。東京の神学校で学生がみずから命を断ちました。場所は神学校の礼拝堂です。このことの打撃は大きく、今も悲しみから立ち直れないでいる人たちがたくさんいます。

そのような中でヘブル書の呼びかけを聞きましょう。「イエスが祈っておられる。イエスの祈りに耳を澄まそう。あなたがたが立っているその地の下からイエスの祈りが立ち上がって天に達している。その声に耳を傾けよう。」そのようにヘブル書の著者は呼びかけているのです。

第一に、地の中から叫ぶイエスの祈り、血の叫びは、苦しみ苦しめられた人々の叫びを代弁します。虐げられ、血を流し、絶望して死んでいった人、抵抗して殺された人々——その思いとうめきをイエスが引き受けて祈り、叫んでおられます。

この出来事をおしてあらためて神学教育の課題を思わされています。第一は、宣教課題の明確化の必要性です。教会は宣教のために何を託されているのか。これは福音理解の明確化と密接に関係しています。

「アベルの血よりも立派に語る注がれた血」。イエスの血が語っている。十字架に流された血、大地に注がれたイエスの血が叫んでいる。イエスの祈りがこの大地から発せられて天を揺り動かしている。

ところが一五年以上前に、韓国と日本の聖公会の交流プログラムがありました。そのとき日の丸のことが話題に出ました。ある韓国人の女性信徒がこう言われました。「日の丸の丸はなぜ赤いのか。それは殺された人の流した血のゆえに赤い」。

第二は、その宣教を担う者——牧師・教役者の主体をどのように形成するか。もつとはつきり言えば、教役者・神学生をどのように支え、守るか。希望を持って前進できるようにするにはどうすればよいか。もし将来に希望を持つことができたならば、みずから命を断つことはなかったのではないか。宣教課題の明確化と、宣教を担う者の主体性の形成は、神学教育にとって緊急

兄のカインに殺されたアベルの血は地の中から天に向かって叫び、その声は神に届きました（創世記第四章）。アベルの血が天に届くほど強く語るものであったとすれば、まして十字架に流され地に注がれたイエスの血は、もつと激しく神を揺り動かさずにはいない。イエスの血は「アベルの血よりも立派に語る注がれた血」なのです。

日本国家は罪のない人々の血を流させた。その血がイエスの祈りとなって叫んでいます。

今年四月、私はあるキリスト教系の小学校の入学式に出席しました。ところが校門にはふたつの日の丸が交叉して掲げられていました。日の丸の下をくぐらされたのは屈辱です。神学教育には歴史教育が必要で

す。日本という国が隣国との間で何をしてきたか。日本の社会は人を苦しめ、血を流させてこなかったか。人の痛み、苦しみに対する感受性を大切にしたい。歴史の事実を知ること、人としての感性が大事です。机の前での学びと現場での学び。これは両方必要です。

現場と無関係に頭の勉強だけをすると現実から遊離します。しかし机に向かう勉強を軽視してはなりません。たとえば、私は神学生るとき「神の国」というのを習いました。神の国とは地域区分ではなく「神の支配」のことだと。分かったような分からないような話でした。しかし今、宣教現場にいと、「神の支配」という言葉が非常にリアルティをもつて来ます。神とは別の悪しき力に直面するとき、「神の国」という言葉が生きて迫ってくる。「悪霊」「神の国」という言葉を知らなければ現実を把握する言葉を持たない。しかしこの言葉を知っているおかげで現実を明確に認識できます。希望を持つことができます。知識は

働きの力になるのです。

第二に、イエスの地の中からの祈りは執り成しの祈りです。それは血を流させた加害者のための祈りでもあるのです。

ステパノはエルサレムの神殿を批判し、そのゆえに神殿冒流罪で石撃ちの刑となりました。ステパノは血を流して死のうとしたとき、こう言いました。使徒言行録第七章です。

「人々はこれを聞いて激しく怒り、ステパノに向かって歯ぎしりした。ステパノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立つておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立つておられるのが見える』と言った。」七・五五―五六

ステパノにはほんとうに見えたのです。人の子イエスが神の右に立つておられるのが見えたのです。

神学教育は、人の子イエスが立つておられるのが見えるようにするものでなくては

なりません。すべての人に見えるわけではありません。開かれた目、澄んだ目、神と人とを愛してそのゆえに迫害された人の目に、人の子イエスの姿が見える。神学教育は人の子イエスが見えるようにするものであってほしい。

あるとき弟子たちは畑を見て「収穫までまだ四カ月もある」と言っていました。ところがイエスは言われた。

「目を上げて畑を見なさい。色づいて刈り入れを待っている。」ヨハネ四・三五
イエスには色づいて収穫を待っている麦畑がはっきり見えたのです。幻視、幻覚と人は言うかもしれませんが。しかしイエスが見ておられたものこそが事実であり、すぐに現実になる事柄であったのです。

あるドイツの神学者がイエスの復活について研究を重ね、数十年の研究成果を分厚い書物にまとめたそうです。その結論は「復活はなかった」。愚かなことです。いや、その研究者にとっては大事なことであったのでしようからそれは良しとしましよ

う。しかし我々にとつて大事なのはそんなことではない。イエスの復活が歴史的にあつたかなかつたか。そんな客観的なところに身を置いた研究に時間とエネルギーを費やすのはたいがいにおいて、復活されたイエスに出会うこと、イエスの復活の中に自分の復活を見出すこと、復活のイエスとの関わりにおいて生かされて自分も生き、人も生かすようになること。これが大事です。これが神学教育のすべきことです。

ステパノの話に戻ります。ステパノが石で撃たれ血を流して死のうとするときこう祈りました。

「『主イエスよ、わたしの霊をお受けください。』」

それからひざまずいて

『主よ、この罪を彼らに負わせないうください。』と大声で叫んだ。』使徒言行

録七・五九―六〇

血の責任を負わされたら生きていけない。滅びてしまふ。加害者のためにステ



パノは祈った。イエスは十字架の上で加害者のために祈られた。加害者のためにもイエスが執り成しておられる。あなたは滅びてはならない。イエスによつて祈られ、贖われ、支えられているがゆえに、わたしもあなたも生きることを許される。

このことは神学教育においても大切です。自分がイエスによつて祈られ、贖われ、支えられていることを知ること。神学生がそのそのことを知り、感じるができるようにしたい。神学生は多くの重荷を抱えています。危うい状況に置かれています。学校の教師は学生のために祈らなくてはなりません。イエスの祈りによつて教師も支えられ、また自分も祈りによつて学生を支える。神学教育においてこれは大事なことです。

第三に、地の中からのイエスの祈りは、

究極的には神への賛美です。このように絶望的な世界が、しかしやがて必ず神の恵みに満ちた世界に変えられる。神の国は必ず

到来する。正義と平和と愛の神の意志は必ず実現する。「御国が来ますように」という祈りは空しい祈りではない。人のぬぐうことのできない涙を、神がぬぐってください。神の国は今、闇の中に実現し始めている。悪ではなく、神の恵みが勝利する。そのしるしをイエスは見ておられるので、地の中からのイエスの祈りは賛美となるのです。

外から圧迫され、内には力を失っている人たち、あなたがたの足もとから、あなたがたの立っている大地の中から祈っておられるイエスの祈りを聞きなさい。あなたがたを守られるイエスの祈りを聞きなさい。イエスが地の中から祈っておられるから、あなたがたも生きて祈ることができる。人をいたみ、人のために執り成し、神を賛美することができる。

イエスの血の叫びに私たちも加わり、イエスの執り成しに支えられて私たちも人を

執り成し、イエスの賛美と共に私たちも神を賛美する。神の国の実現に私たちも叫びと執り成しと賛美をもって参加する。神学教育はそれに向けて人を形成する大切な場所です。神学校と教会がこのことのために力を合わせるができるように願ひ、祈ります。

(祈り)

讚美歌 21 一七五 わが心はあまつ神を



聖書とわたしの出会い (十一)

一九七七年、聖公会神学院を卒業し、下鴨キリスト教会に赴任したころのことです。

エジプトを脱出したイスラエルの民の約束の地への旅路は非常に厳しいものであった。外敵の襲来、内部の分裂、飢えと渇き。民はモーセに向かって不平を言う。

「イスラエルの人々は彼らに言った。『我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。』」

主はモーセに言われた。『見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。』……

見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。』……

そこで、彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。……

イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウエファースのような味がした。『出エジプト記一六・一』

このようにイスラエルの民は、その日の糧をその日、その朝ごとに受けて歩んだのである。私も、その日一日を生きて働くだけの信仰を祈り求め、それをその日ごとに神からいただいで、かろうじて務めを果たしていた。主の祈りの「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」は切実な祈りであった。

慣れない事務に時間を取られて、説教や聖書研究の準備をする時間がなかった。毎日がぎりぎりだった。補助金、調査、共済……。茶色の封筒が届くと恐怖だった。それでも確かに、神は私を日ごとに支えていてくださったのだ。

二年目、一九七八年の秋に結婚し、また一二月に執事（聖公会では主教、司祭、執

事が聖職であり、公的な場ではカラーをつける)に按手された。神を見失っていた自分が聖職になったのは奇跡だと思った。生活も少しずつ落ち着いていった。多くの人々が祈っていてくださったのだと思う。学生時代の「復活経験」のようなはつきりしたものは与えられなかったが、信仰をめぐる苦しみも徐々に癒され、元気が回復していった。

京都教区の夏の中学生キャンプを何年か担当した。ある年は創世記のヨセフ物語を取り上げた。兄弟たちに恨まれたヨセフがエジプトに売られ、やがてエジプト全国を治める者となり、飢饉のため食糧を買いに来た兄たちと再会する物語である。ヨセフがファラオの前に立って安定した地位を得たのは三〇歳であったという(創世記四一・四六)。そのとき私も三〇歳、自分も長い信仰の苦しみの後、ようやく安定を与えられたように思った。

ヨセフ物語の結末で、彼が兄たちに次のように言うところがある。

「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民

の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」五〇・二〇

またパウロの手紙には次のような言葉がある。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」ローマ八・二八

神が私に対しても、これまでのこと一切を益としてくださったのだと思った。

聖公会はカトリックとプロテスタントの中間に位置する教会である。宗教改革を行ったが、ローマ・カトリックと共通する伝統も受け継いでいる。「聖公会の立場はこうだ」というようなはつきりしたものが少ない。ある意味でいかげんな教会だが、それだけ幅広い立場を包容できるとも言える。私自身は長い間「自分はプロテスタントだ」と自覚していた。カトリックの聖母マリア無原罪や教皇の無謬性の教理などはとんでもない間違いだと思っていた。関心は「み言葉」に集中し、「教会論」や「聖餐論」への関心は相対的に少なかった。神

学校でもそういう点を指摘されたが、「それで何が悪い！」と居直っていた。

そのような私の偏りを憂えてか、司祭按手への準備として「聖餐論」を課題とするように教区から指示された。ウィリアム・テンプル(元カンタベリー大主教——英国教会の代表者、全世界の聖公会の象徴的代表者。ローマ・カトリックの「教皇」と違い、世界の聖公会に対する命令権は持たない)という人の聖餐論を読むように言われたので、それに取り組んだ。そうして次第に聖餐式の重要性を知らされていった。

執事按手から一年弱、一九七九年一月二二日、司祭に按手された。司祭になってはじめて聖餐式の司式(執行)が許される(司祭には「パンとぶどう酒の聖別」「罪の赦し」「祝福」の権限が与えられる)。

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。……この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」ルカ二二・一九・二〇

司祭となつて自分で聖餐式を司式してい

て毎回感動した。イエス・キリストの臨在（そこにキリストが現実存在すること）を感じるのである。創世記第二十八章にヤコブが野宿して夢を見る話がある。天まで達するはしがが地に向かって伸びており、天使たちがそれを上ったり下ったりしていた。夢の中で彼は神の声を聞く。そしてヤコブは眠りから覚めてこう言う。

「まことに主がここにおられるのに、わたしは知らなかった。」二八・一六
これが聖餐式についての、そのころの私の思いであった。

教会の聖書研究会や婦人会では、マルコによる福音書、ヨハネの黙示録、エレミヤ書などを連続して読んだ。マルコ福音書の中で一番印象に残っているのは、第九章のイエスの山上での変容話の話である。イエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて高い山に登られたとき、彼らの前でイエスの姿が変わり、服が真っ白に輝いた。そのとき、旧約聖書を代表する二人の人物、モーセとエリヤが現れて、イエスと語り合っていた。

「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の

中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。」「マルコ九・七―八

ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。今までもイエスに従ってきたのだが、三人の弟子たちはこの時、あらためてはつきりと「イエスが一緒におられる」という事実のかけがえのなさを知ったのである。イエスがともにおられる。何がどうなろうとこのイエスにどこまでもついて行こう、と彼らは決心した。イエスが私たちとともにいてくださるといふことの慰めと力を教えられた。

エレミヤ書は、預言者エレミヤが人間としての弱さをさらけ出してうめき訴えている姿を映し出している。神の情熱の火に焼かれるようにして（二〇・九）、エレミヤは人々に語った。そのために彼は迫害を受ける。

「あなたはご存じのはずです。主よ、わたしを思い起こし、わたしを顧み、わたしを迫害する者に復讐してください。い

つまでも怒りを抑えて、わたしが取り去られるようなことがないようにしてください。わたしがあなたのゆえに、辱めに耐えているのを知ってください。

あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍りました。万軍の神、主よ。わたしはあなたの御名をもって呼ばれている者です。

……なぜ、わたしの痛みはやむことなく、わたしの傷は重くて、いえないのですか。あなたはわたしを裏切り、当てにならない流れのようになられました。」「エレミヤ一五・一五―一八

エレミヤ書を読むと、エレミヤが神と人々とに献げた「真実」が迫ってくる。イザヤ、エレミヤ、エゼキエルはいずれも私に大きな影響を与えたが、情情的に一番共鳴するのはエレミヤである。

そのころ韓国の元大統領選挙候補、金大中キム・デジュン氏（後に大統領



領)が拉致され、死刑の危機にあった。日本で救援運動が起こり、私も京都市内の有志と共にこれに参加した。黒のキャソック(礼拝用の服)を着たままでデモに加わったりもした。

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を負わせる宣告文を記す者は、

彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、

やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」イザヤ一〇・一一

「彼は弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。

……正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」イザヤ一・四一五

このような言葉に励まされた。金大中氏は国際世論の高まりもあって、やがて自由の身となる。

下鴨に来て五年目、自分の祈りが十分でない気がしていた。牧師に任命されて(日本聖公会では、司祭が正式に教会に責任者として派遣された場合に「牧師」と呼ぶ)責任が重くなり、疲れも感じていた。

「イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。そこで、イエスは言われた。『祈るときには、こう言いなさい。』

父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。……」ルカ一・一一

祈ることをイエスに学びたい。毎日唱えている「主の祈り」をもっと深く祈りたい。そう思つて、主の祈りについての連続説教を始めた。ヘルムート・ティリーケという人の「主の祈り」の説教集に導かれるようにして回を重ねていった。ティリーケの本に書かれていた「父(神)の心は子のために脈打っている」という言葉を今も鮮明に覚えている。一〇数回の説教はまとめられて、下鴨キリスト教会から出版された。

その年の暮れ、思いがけないことが起こった。立教大学文学部キリスト教学科の助手になるようにとの話である。神学校時代の恩師が動いてくださっていることを知った。成り行きに(信仰的に言えば、神の御

心に)任せようと思つた。辞退しなかったため話は次第に進展し、本決まりとなった。「聖書と私の出会い」はひとまずこれで終わります。機会があれば続きを記しましょう。

○音楽に対する関心に続いて詩に対する関心が戻ってきました。万葉集、中国の「楚辞」、ドイツのハイネ、ヘルダーリンなどを時々開いています。リルケの「秋」は学生時代から惹かれていた詩です。

○教育基本法「改正」の危機が迫っています。「改正促進委員会」で民主党の西村慎吾国會議員は「お国のために命を投げ出し、でも構わない日本人を生み出す」と発言しました。子どもは「お国」のためにあるのではなくありません！子どもたちの命を国家に左右させてはならないと思います。

『アリエル』一六七号(復刊第二二号)

二〇〇四年一月二日発行。

郵便振替〇〇九一〇〇一六〇五六八

「井田 泉」

ホームページ

<http://www002.npp.so.net.ne.jp/izaya/>

E-mail izaya@da2.so.net.ne.jp